

今回は「セルフ・エスティーム」という言葉が出てきます。簡単に言うと「自己尊重」や「自己肯定」を意味する言葉ですね。これが低いと僕たちでもミスを連発したり、柔軟に対応できなかったり・・・自信が無い時って何をやってもダメですもんねえ。まずは「自分は自分」と認め「自分にしか無い良いところ」を見つける。簡単なようで難しい事かもしれませんね・・・久田

第16回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聰

どのような対応が求められるのか

発達障がいがあるか、または、その疑いのある学生に対してどのように対応していけばよいのでしょうか。

今回は、具体的な対応を考える際の留意点について考えておきたいと思います。

私が大学で相談に乗った何人かの学生はいずれも診断はうけていませんでした。しかし、学生からの相談の内容は、大学生活のなかで困っている「対人関係」や「コミュニケーションの問題」、「生活の管理」、「レポート等の提出」といったようなことでした。いずれの相談者も、相談内容や相談時の様子からは、発達障がいが疑われる学生でした。このように、私が相談に乗った学生たちは発達障がいという診断をうけていなかったということです。実際には、私のところに相談に来る学生たちは発達障がいのある学生の方が多いということなのです。富山大学の西村は、「印象として大学に入学する学生で発達障害という診断を持ってくる学生は少なく、ほとんどが未診断のまま入学してきており、実際の学生生活がうまくいかず困り感をもち来談するケースが多いように思われる」(2006) いうように報告しています。私も全く同じ印象を持っています。

このような場合、対象となる学生の相談者として関わる際には、配慮しなければならないことがあります。

それは、その学生は発達障がいという診断をうけていないからです。つまり、障がいの受容などの過程は経ていないということになるからです。このことを十分に意識した関わりをしていかなければならぬということです。相談に乗る者は、発達障がいに関する知見を持ち合わせると同時に、その特性を理解した上で援助的な関わりをしていかなければならぬということになります。

相談にきている学生のプライドを傷つけたり、自己効力感、自己有能感をなくしてしまったりするような対応があつてはならないのです。この場に、自ら自分の生活がうまくいかないことを意識して、勇気を出して扉をたたいて相談にきているのです。そこに至るまでの本人の気持ちの変化にも十分に配慮する必要があるのです。

援助的なかかわりかを考える際に大切なことは、まず、大学生活を送るなかでどのような点に困っているのかを明らかにすることです。そして、それを明らかにした上で、困っていることに対してそれをうまく解決することができるような提案をしていく必要があります。様子を見ようといったことや、大丈夫というようなことではなく、何か自分からアクションをかけることができるような、行動を起こすことができるような具体的な提案をしていかなければならないということなのです。

5 自己効力感と自己有能感を高める

自己効力感や自己有能感はセルフ・エスティームということばで表現されていることが多いです。セルフ・エスティームということばは、発達障がいのある学生の相談を考える際の一つのキーワードになるのです。セルフ・エスティームについて森田はマズローの欲求の五階層理論を引用して次のように説明しています。

マズローの要求の五階層理論では、人間には、「生理的なニーズ」(最低限の食物、睡眠、性、酸素、住宅など)、「安心・安全へのニーズ」(恐怖や苦痛がないこと)、「帰属感と愛情のニーズ」(自分を受容してくれる家庭や仲間やグループ、愛し愛される関係のあること)、「承認のニーズ」(認められること)、「自己実現のニーズ」(社会的存在として自己の個性、能力、可能性を最大限に生かすこと)のニーズがあるとしています。そして、セルフ・エスティームをこの五段階の階層理論に位置づけるとするならば、それは、「承認のニーズ」に含まれるものであると述べています。この「承認のニーズ」の基盤は、「生理的なニーズ」、「安心・安全のニーズ」、「帰属感と愛情のニーズ」ということになります。これら3つは、いずれも、私たちが生きていく上でその動機付けに大きく影響を与えるものです。そして、これら3つのニーズの上に、セルフ・エスティームを含む「承認のニーズ」が成立するということなのです。そのニーズが満たされて初めて、「自己実現のニーズ」が生まれるとしているということです。

このようなことから、森田は、「セルフ・エスティームを高めるためになによりも大切なことは安心感である」、「安心できる環境がないところで人が健康な自己を発達させることはきわめて困難である」と結論づけています。

このように、セルフ・エスティームをとらえるとするならば、セルフ・エスティームを高めるためには、相談に来た学生が安心感をもつことができるよう相談にのっていく必要があるということになります。「あなたはあなたで大丈夫だよ」という安心感をもつができるようにしていくことが大切だということなのです。では、どのようにして安心感をもつができるようにしていけばよいのでしょうか。次回はこのことについて考えてみようと思います。

参考文献 ☆西村優紀美 (2006) 「学生相談の立場から」 LD研究 第15巻3号 ☆森田ゆり (1999) 「エンパワメントと人権」解放出版社

坂井聰先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞
(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など